

武田麟太郎全集

第三卷

# 武田麟太郎全集

## 第三卷



新潮社

武田麟太郎全集 第三卷

昭和五十二年十一月十五日印刷

昭和五十二年十一月二十日発行

セツト定価九五〇〇円

著者 武田麟太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一、電話東

京 業務・二六六―五一―一、編

集・二六六―五四―一、郵便番号

一六二、振替東京四―八〇八

印刷所 塚田印刷株式会社

製本所 神田加藤製本

（乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社  
通信係宛御送付下さい。送料小社負  
担にてお取替えいたします。）

武田麟太郎全集 第三卷 目次

銀座八丁

若い環境

井原西鶴

簪

《初期習作篇》より

掌理

古風な情景

人形がほしい

ぐみうり

おんなの角力

表では

歴史

田舎と人形

第一章

かつみさん少しばかり

七

六

二〇

二一

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三六

三九

四〇

《第三卷収録作品初出一覧》

三九

解説

三〇

武田麟太郎年譜

三七

編纂／和田芳恵・薬師寺章明



武田麟太郎全集

第三卷





## 銀座八丁

藤山さん、女の人から電話だよ、とガタピシする古い階段の中途から、下の果物屋の小僧が声をかけた時、ちょうど彼は鬚をあたり終ったところで、化粧水をピリピリする顔に塗り込んでいた、誰からかな、と考えながら、下りて行った。——ひょっとすると、バアテンダーの彼と同じく、西銀座の酒場「ロオトヌ」で働いている女給ののり子からかも知れない、きょうは灯がついて店の開くまで、赤坂のホールで一しよに踊ろうと約束してあったのだが、急に都合が悪くなったのかも知れない。

もうすっきり春になって了った、生暖かくて肌は汗ばむほどのいい天気である、明るい色彩に富んだ果物の官能的な香いが、むうっと若い藤山の鼻を刺した。

「——こちらは、大森の豊田家でございますが」と、電線を伝って来る、女中らしい声が云った。

のり子ではなかった、と思うと同時に、なるほど、と彼は独りでうなずいたのである。

その待合は「ロオトヌ」の女主人あき子のよく出入するところで、彼もまた度々彼女に連れられてお伴をしたことがある、——昨夜おそく、もうかんばん近くになってから、あき子は誰かに呼びだされた見え、ちょっと、といつてそそくさと出かけて行ったが、そのまま帰って来なかった、藤山は店のあとじまいをし、唯一つだけ点けた電燈の下で、その日の上り高と照合して伝票を調べ、それを現金と一しよに小さな黒鞆に納めると、新富町の彼女の住居の方へ回って見たが、留守番の老婆がひとりでいるだけであつた、こんなことはよくあるので、彼は別に気にとめず、責任上鞆は預かって、新橋二丁目の下宿へ戻つたのである。

「——あの、マダムがあなたにすぐこちらへいらしてほしいのだそうですが」と、声は続けて云つた。

「ああ、そう——いるんですか、他に誰か」と、彼は念のために聞いて見た。

「——は、あの」と、漠然と相手は返事をして「その時、何ですか、鞆も一緒に持って来て頂きたいって」

「分りました」と、彼は癖の軍隊口調で、はつきりいった、

——また、勘定が足りなくなつたんだろう、だらしない話だ、だがそうすると、彼女の方で払いをしてやる相手にちがいないが、一体誰だろう、あいつかな、と胸の中でつぶやくのであつた、それにしても、二人がさんざん遊び興じていい思いをしたあと始末に、こちらが行かねばならぬなんて、あんまり有難くもない役割だ、と苦笑した、そこで、わざと、ゆっくりしてやれと、

「じゃ、二時間ほどして、伺いますといつて下さい、ちよつと先に果す用があるから」

のり子に逢つて、ゆっくり遊んでいられない事情を話し、少しだけ踊つて行こう、それから大森へ行けばいい、と決めたのである。

すると、豊田家の女中は、あわてていった。

「——もしもし、あの、大急ぎでお願いしたいんですけど、——実は、マダムがお悪いんです！」

「悪いって？ 病氣ですか」

「ええ、大へんなのですよ、けさがたから」

——何てことだ、と藤山は舌打ちした、待合で病氣になるなんて！ 彼は、昨夜からそこにいたであろう相手の男にも、妙に腹立たしい氣持で、洋服に着更えるのであつたが、お洒落なので、なかなか手間どつた。

果物屋から、春の陽ざしの中へ出て来た藤山の姿を、もしも彼をバアテンダーと知らない人が見たら、何ものと思ふだろう。

一分の隙もない青年紳士。

流行のラグランの春外套スプリングコートの下には、英国風に仕立てた淡鼠色の小格子縞を均整のとれた軍隊帰りの身体にうまく着こなし、同じ系統の縞色のマフラーも落ちついているし、手套といい、ステッキといい、すべてびつたりとした彼の容姿を——夜ふかしの職業に係らず赤味を帯びた健康そうな頬、太い眉をあげる時冷たい光に見開く眼、やゝ怒つた鼻も、氣障つぽくまげる口も魅力がないとはいへぬ、幅広い胸を張り、少しく棄鉢氣味に踏み出す足取りは映画の影響で、とがめてはならないだろう——そうした彼の容姿をたすけて、現代的な美を感じさせていた。

もちろん、彼が酒場「ロオトヌ」から受取る給料は僅か卅円で、これに添うるに毎夜消費される酒の空瓶が自分のものになり、酔狂な客によつては、女たちと同様にチップを呉れたりするが、総収入はどう考えて見ても、これだけの服装をするには不十分なのである。——だから、そこには何かあるのであろう。

藤山はゆっくりと煙草に火をつけながら、流している自動車物を色していた。紳士に相応しい良い車を拾わねばならないのである。

京浜国道は混雑していた、白っぽいアスファルトは、トラックや自動車、自転車で充滿して、黒い油のしみ出たタイヤの跡が幾すじも残っていた、警笛や軋む車輪の騒音はぶつかりあって、人をいらいらさせた。

鈴ヶ森のガードを少し過ぎて、左側海岸の方へ折れると、急に静かになるのであった。夜ならば、毒々しいネオンライトで、家の名を大きく屋根の上に出している待合が二三軒立ちならんでいたが、さすが白昼のことで、森閑とした空気のうち沈み、眠っているようであった、磯の香が春風にはこぼれて来た、海には海苔を採る人たちが、のどかに見られた。

豊田家の門から庭づたいに、よく肥えた女中に案内されて、藤山は離れの部屋へ通ったが、途中で「どうしたんだ」と、たずねた。

「略血なさったんですよ、——私たちは最初心中かと思つて大騒ぎしました」

ふんふんと、彼はうなずいた、あき子は前から肺が悪くて、彼が知ってからもそうした経験は幾度もあったので、そんなら大したことはない、と彼は考えたのである。

しかし、いうまでもなく部屋の襖を開いた時、彼は急を聞いて駆けつけたという狼狽した色と、如何にも心配そうに眼を伏せた神妙な表情とを作っていた。

その離れの四畳半は、どういふ意味からか、四壁がちょうど腰の高さ程に鏡がはめこんであった、だから、あき子の蒲団がいやにけばけばした赤い色をあちらこちらに反射させていて、視力を奪おうとするのであったが、彼は逸早く男が——黄色いくたくたのレインコートまでも着けたまゝ寝そべっている男が誰であるかを見極めた。

やはり、あいつであった。

だが、藤山はそちらの存在は全然無視したような冷い態度で、外套を脱ると、あき子の枕許に坐つて、

「どうしたんです、一体」と、詰問の鋭い響きをあいつに利かし、彼女の青ざめた額の上にかゝむようにした。

あき子は透きとおるような真白な顔になり、もの憂げに、大きな二重眼瞼を開いたり閉じたりしていた。

「もういいの、何でもないので、彼女はいつてから、括れた頭をちよつと突き出すように動かして、咽喉の奥の方で微かな咳をした、——普段でも、彼女はそんな力のない咳を、殊に何かおしゃべりをした後には必ずしていたが、

酒場では誰も気づかなかつた、その咳と両頬の不自然な赤さ、毛細管の先端まで血の走っているのが判る赤さは、彼女の病気のしるしであつた、しかし、酒のせい以小肥りした身体や化粧のために、寧ろ健康に見られたのである。

「最近は少し飲みすぎましたからな」と、藤山は堅い表情でいった、——「御乱行もいゝ加減にして、養生してもらわなくちゃ」

彼はレインコートを着た男の方へ眼をやつた、その男は、あいかわらず寝そべつたまま、あちら向いていたが、油をつけてない髪の毛の延びた頭に肘をかつて、不興気に新聞を繰かえして読んでいるのが、いびつな鏡に映つていた。

あき子は、胸にあてていた氷嚢を取り出して、畳の上に置いた、すっかり生暖くなり、気味悪く、ぐにやぐにやしていた。

藤山は、それをつかむと、黙つて立ちあがつた、庭履きを窮屈そうに突っかけて、料理場へ行つたのである、そこで、氷を割つて入れかえながら、女中と二三の会話をした。「昨夜は随分と酔つて、二時すぎになつて、いらっしやいましたわ、それからまた、お酒なんですもの」と、女中はあきれたようにいった。

昔の生えた古い庭石伝いに戻つてくると、樹と樹との間に、ちらと動く人影があつた、それは急ぎ足に出口の方へ

行つて了つたが、あのレインコートの男にちがひなかつた。部屋に入ると、想像にたがわず、果して彼の持つて来た黒鞆は開かれてあつた、伝票はばらばらになつて、枕許にちらばつていた、——やはりあいつに金を呉れてやつたのである。

あき子は、すぐ新富町へ帰りたい、といひだした、寝台車を呼んでくれ、それから、気がついて見ると、寝巻も買つて来てもらわねばならぬ、ここのを着て帰れないから、というのであつた。

「大丈夫ですか、そんなこととして、——もう暫く、静かにしていただく方がよかないかな」と、藤山は危んだ。

「大丈夫、クラウジンを二本注射したんだし、すっかりとまつてしまつたようだから」

じゃ、せめて暗くなるまで、ここにいましよ、それに昼日中じゃいくら何でも、恰好もつかないし、と皮肉をまじえたつもりで、彼はいった。

「駄目」

そういいきつて、あき子は、ハンドバックから小さな手帳を取りださせた。——そこには、日々の彼女の予定、彼女の所謂「ランデヴ」の表が簡単な符号で記されてあつた、午飯は誰とどこで、それから誰と逢つて映画を見に行く、次に、といった風に手際よく時間を無駄なく区切り、酒場

に來る客の誘いに応じているのであった、きよらの男たちは待ち呆けを食うわけである。

「五時頃、内田に資生堂で逢うことになつてゐるの、——きよら、お金貰う約束なんだけど、まさか、ここへ呼ぶわけにもいかないしね、だから、どうしても帰らなくちゃならないわ、その時分電話して、病氣だから、住居の方へ来て下さいって、云つて頂戴」と、咳したり、痰をはいたりしては、きれぎれにいった。

——内田というのは、彼女のバトロンで、貴族であつた。

その内田が、赤玉のオランダチーズと果物籠とを携えて、新富町へ來たのは、五時をほんの少し過ぎた頃であつた。

「何故、もっと早く知らせてくれなかつたのです」と、彼らしい丁寧な言葉つきで、柔和にいった、そして、三十五にしては生えあがり、艶々しく光っている額や、和服の袖の中まで、手帛でにじみ出た汗をぬぐうのであつた。

ちようど一時間前に、あき子と藤山は、やつとのことで、大森から戻つたのである、馴染の家でも借りるのが彼女は嫌いで、今まで一度もそんなことはしなかつたが、その時は結局診察料薬代などは立て替えてもらわねばならなかつた、そこで、銀座のお店の方はよく存じておりますから、

という豊田家に、わざわざ住居の所在も教えて來たのであつた、——それから、担ぎ込まれた彼女に、すっかりうろたえて了つた婆やを促して取り敢ず、かかりつけの町医者を呼び、薬瓶なども枕許に取りそろえた、落ちついて、内田へ、青山高樹町の自宅へ電話をかけさせると、すでに彼は外出したあとであつた。

あき子は彼にいうのである。

「——でも、あまり御心配をおかけするのさうか、と思ひましたので、それに、大したことはないんですもの」

さすがに、彼女は烈しい発作の後の衰弱を、帰つて來たので一安心したせいも、今になつて見せはじめていた、少しくしわがれた声や、微かな作り笑いも、殊に内田には、痛々しげに感じられた。

藤山は、ちよつと舌を出したい氣持で、

「では、僕は店へ行きますから——どうせ、きよらは日曜だから、閑でしようが」と、二人きりの時とはちがつた慰態な態度で、病人にいい、あす朝早く來て見ます、とつけ加えるのであつた、内田にもいやに四角張つた挨拶をして、表へ出た。

界限の芸者置屋では、女たちが鏡に向つて化粧しているのが見られた。その小道を抜けて、三吉橋にかゝつた。

歩きながら、藤山の頭には、今の内田の顔がこびりつい

ていた。

——公卿華族らしく血色が悪くて、眼尻の下った、受け唇の、全体に華奢というよりは見るからに頼りない孱弱な肉體。事業好きで活動家だった先代譲りの財産によって、ふところ手のまま、無為徒食している退屈な身分。絵をやっているが、そしてその一枚は「ロオトンヌ」の黄色い壁にもかけてあるが、もとより拙劣で、取り立てていうほどの事はない、そのくせ、何や彼やと芸術に一片の趣味を持っていて、單調な生活のはかない装飾にしている、刺戟を酒と女とに求めて、辛うじて生存の興味を呼びさまそうとするのだけれども、烈しくそれらに没頭して了うだけの勇氣や情熱に欠けていた、——唯も手を束ねて、亡んで行くのを悄然と待っているといった風の可哀そうな男！

ずっと前から、藤山はこの親切でお人よしの内田を何とか利用しようと思っていた、彼の予想によれば、どうせ酒場「ロオトンヌ」はそう永くはない、今のところ、内田のおかげでやっと持ちこたえているのにすぎなかった、——あき子の出鱈目な行動や、彼女のルーズさからくる回収不能の常連の貸金が巨大な額に上っているしまた一切を委任されている彼のごまかしなぞによって、経済はすっかり行きづまっていたからである、だから、出来るだけ早く、身の振り方を決めて置く必要があるが、それには内田に取

って——

そこまで考えた時に、彼はギョツとした、マダムの最近の愛人であるあいつも亦内田に食いきがろうとしていることに気づいたからである。

日曜日は、銀座のもっとも田舎臭くなる日である、賑やかというよりは、むやみに騒々しく、埃りっぽく汚れて、落ちつきがない、——日頃、この町に余り縁のない人たちが家族連れで、ぞろ／＼と物珍しそうに歩き、その代り、いつもはこゝを自分の庭のようにしている連中が、影をひそめているのである。

殊に、その日は第一日曜だったので、東側の舗道なぞは、百貨店を中心にして、自由に身動きもならぬほど混雑していた、ちやうど夕暮れの、すっかり暗くなりきららない中途半端なひとゝきで、すべての風景は灰色に閉じ込められ、憂鬱な限りであった、——一丁目から尾張町にかけては、あちらこちらでレコード宣伝の拡声器が安手な流行歌を一帯に響かせ、それが幾重にもかさなりあって、唯でさえ喧しい人や車の往來を尚一層かき立てていた。

藤山は人ごみを抜けて、西側の裏道をいった、酒場「ロオトンヌ」は五丁目にある。

まだ誰も来ていなかった、——昨夜のままの乱雑な内部は暗くてむろっとすえた空気の中に、争えぬ女の体臭がこもっていた、テーブルの上には飲みかけのグラスやビール瓶がひっくりかえっていたり、食いものの殻や紙ぎれがそこいらに小汚く、位置の出鱈目になった椅子やソファの下からは、大きな鼠が人を恐れず、音を立てて、走り回っていた。

彼は箬め板の床の上に唾をべっと吐いてから、腰を下し、暫らくじっとしていた。

「——」

何とか元気のいい声で、花屋が入って来た、昨夜の花を捨て、新しく花瓶に生けるのである。

「婆やはまだなんですか」

「うん、おそいんで、実際困っちゃまう、帰りがけに寄ってくんないか」

そういつている時に、髪のスゝけた、黄色い顔の婆さんが、風呂敷包み片手に、腰をまげるようにして、現れた、彼女は、

「おそくなりまして」と、あやまり、奥の控え部屋の方へ入った。

「駄目じゃないか、もう幾時だと思うんだ、もう少し早く済んでないと、商売にさしつかえるじゃないか！」

藤山は、そのわびしい背後姿におっかぶせるように、とげ／＼しい声で嘸鳴るのであった。

彼女は近くに住んでいる、金春芸者相手の老車夫の女房である、ここの掃除と、女給たちの簡単な夜食を用意してくるのであった。

片づけられはじめた。

空瓶屋が来て、瓶数を鉛筆で記した受取を置いて行く、

藤山は彼にいった。

「景気はどうかね」

すると空瓶屋は、どこどこさんは、と銀座酒場の名をあれこれとあげ、各々の景気のよさ悪さについて告げるのであった。彼の扱う瓶の数で、大体のところは察しがつくわけであった。

店はいつの間にか奇麗になった、全部の燈が入った。

藤山も洋服を着替え、バアテンダーの白コートや前掛をつけた。

女たちも次から次へと出て来た、仔細に見るならば、彼女たちは既に疲れていた。きょうの日曜を遊び回って来たのに違いない。

彼女たちは、化粧を直したり、相手の事を「テキ」という風な彼女等仲間の流行語で雑談をし、キャツキャツと笑った。



だが、どうしたものか、のり子だけは中々来なかった、藤山は時計を見てばかりいたが、「どうしたんかな」と、口に出していった。

本当にひまな夜であった。

「これだから、日曜日はきらい」と、短く切った髪をうしろへ撫でつけるようにして、町子という女がいった、口紅のついた煙草を横ぐわえにし、眉をしかめながら、立って行って、レコードをかけた、「藤山さん」と、彼女は両手をのばした、踊ろうというのである。——彼は色とりどりの美しい洋酒瓶を背にして、小さな椅子に腰を下したまま、実話ものの雑誌を読みふけていたが、

「よし」と、スタンド横のくぐりを抜けて出て来た。

町子も銀座では随分と古いもの、あき子がまだ、東銀座三十間堀沿いの、当時の好みでグロテスクな風に造作された暗い酒場で働いていた頃は、朋輩であった。一度不幸な結婚をしたというが、再び現れて、あちらこちらの店を歩き廻っていた。

——大体において、銀座裏の数多いバーでは、女たちの顔ぶれは決っていた、同じところに永い間いるのは稀で、甲から乙へと動いているのである、だから、自然と互に馴

染になって、銘々の性癖はいうまでもないこと、一身上の私事にいたるまで通じあっているのは、驚くほどである、客も同様、決った顔ぶれが各自根城はあるとしても、その一軒だけに通うのは殆んどなくて、ここかしこ飲み歩いている、客も女給も経営者も互に知合いになって了い、銀座裏の酒場全体が一つの世界、客にとってはクラブのような、経営者側からいえばチェンストアのようなものを形作っていた。——

「もう一度」

藤山と町子とがブルースを踊っていると、三人の女は、あき子や客の噂ばなしをしていた。

時々、扉があくので、皆は、いらっしやい、という表情で、そちらを見るのだが、実に多い、花売りの子供や、声色屋、明暗教会と書いた箱をぶらさげた虚無僧、似顔絵かき、バイオリン引き、琵琶を持ったのや、大学生の制服を着て鹿爪らしい面持で仁丹見たいな懐中薬を売りつける若もの、赤ん坊を背負った辻占売りの女なぞであった、彼らはみなひよいとのぞき、客がいらないのを知ると、チュッといった風に出て行った。

「ちゃんと閉めて行かんか」と、藤山は、叱るように怒鳴った、彼らが客に執拗にねだると、いつも彼は黙って出て来て、その強い膂力で、つかみだすのであった。